

秋田県若美町におけるキャベツ栽培について

中 村 寿

I はじめに

秋田県における野菜生産は、農業をとりまく様々な情勢のもとで、その重要性を増している。

近年、秋田県におけるキャベツは、既存産地を核として周辺地域への拡大を図るとともに団地化が推進され、転作野菜としての定着化と産地形成化が図られている。しかし、水田単作地域では技術の不足やリスクの大きさなどから、転作物としての野菜栽培に取り組もうとしない農家が多い。

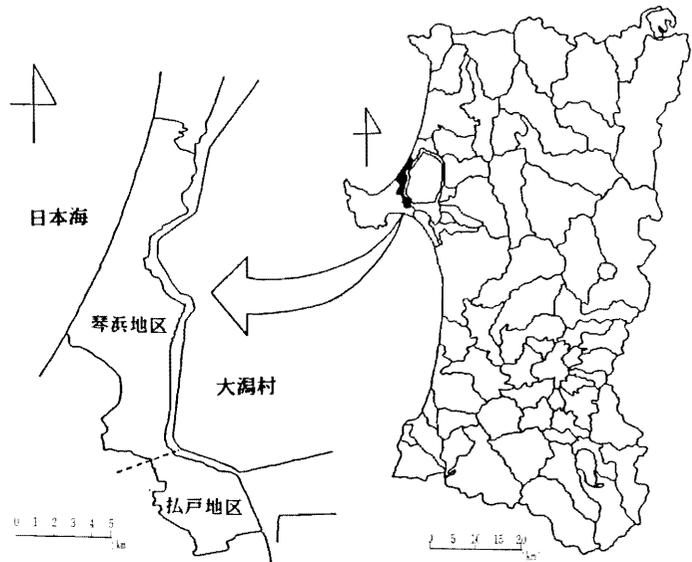


図1. 秋田県若美町の位置

こうしたなかで、水田単作地域において、転作物としてキャベツが栽培され、最近2～3年で作付面積・出荷量とも急激な伸びをみせるとともに、キャベツの作付面積に占める転作地での割合が全県1位である若美町を研究対象地域に選定し、栽培面積・農業経営における位置・生産性・流通などを中心にキャベツ栽培の現状と問題点を明らかにしたい。

研究の方法としては、典型的な水田単作地域である弘戸地区（南部）と、野菜栽培と水稲作の複合経営を行っている琴浜地区（北部）を比較し、検討することとした（図1）。

II 秋田県におけるキャベツ栽培の概要

1. 秋田県の農業状況

秋田県の経営耕作面積（1988年）は、水田84.8%、畑8.8%、樹園地2.8%、であり、農業粗生産額は米66.4%、野菜9.7%、果実3.9%、畜産14.7%と米が圧倒的な位置を占めている。野菜の作付面積は、1971年が最も多く、1982年まで減少してきたが、それ以降は徐々に回復してきている。しかし、自給的色彩の濃い品目は減少して行く傾向にある。広い視野で見ると、野菜は労働集約的であるため、農業従事者の高齢化の進展とあいまって野菜生産は減退する方向にある。

2. 秋田県のキャベツ栽培について

図2-（1）を見てみると、1965年以降、秋田県のキャベツ作付面積は減少しており、特に、1970年から1980年までは急激に減少している。それ以後は、600ha弱で横這い状態である。また収穫量は作付面積に比例しており、1980年から増加に転じている。

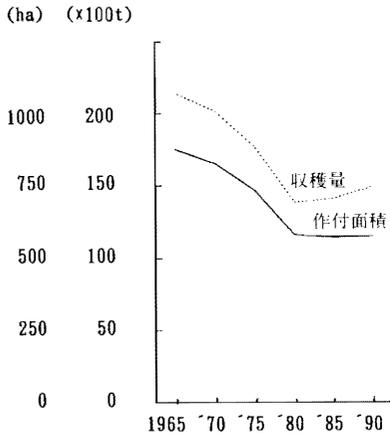


図2-（1）. 秋田県におけるキャベツの作付面積・収穫量
（農林統計より作成）

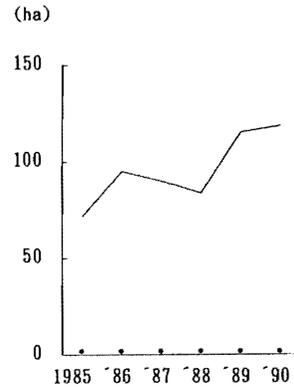


図2-（2）. 秋田県の転作地におけるキャベツ作付面積
（県庁園芸課資料より作成）

転作地におけるキャベツ作付面積は、1986年から1988年まで若干の減少を見たが、全体的にみると増加している《図2-（2）》。秋田県の畑の面積は、14,200ha前後で急激な変化がないことから、転作地の増加が作付面積・収穫量を増加に転じさせた要因である。

次に秋田県のキャベツ作付面積の分布では、能代市が全体の9%、若美町・羽後町が8%、秋田市・大館市・湯沢市・峰浜村が5%となっており、これら8市町村で全体の約半分を占める。このように、県内のキャベツ生産は県北東部と県北海岸部で盛んであるとともに、県南部の平鹿・雄勝地方もまとまった面積を有している。

キャベツ作付面積に占める転作地の割合は、若美町が60%であり、県内主要産地のなかでは最も高い。

III 若美町におけるキャベツ栽培の概要

1. 若美町の概要

南秋田郡若美町は、男鹿半島の付け根の北緯40度線上に位置し、南北に19.4km、東西に2kmの細長い町で、総面積42.74km²と県内市町村の中では比較的面積の小さい町である。北は山本郡八竜町、東は大潟村、南は男鹿市、西の一部は男鹿市と9kmにおよぶ海岸線で日本海に面している。

耕地率は63%と非常に高く、75%が水田、14%が畑地、1%が果樹園となっている。その中で

も払戸地区（南部）は水田が71%、畑地が2%で、果樹園はない。それに対して琴浜地区（北部）は水田が78%、畑地が21%、果樹園が2%となっている。若美町全体としては水田単作地域であるが、南部は典型的な水田単作地域であり、北部は稲作と畑作の混合地域である。

2. 若美町の人口動向

若美町の総人口は、1990年において8,432人である。総世帯数2,000のうち49.1%が農家であり、若美町民のほとんどが農業になんらかの関係をもっており、平均耕地面積2.21haと県内では比較的規模の大きな農家が多い。しかし、秋田県全般にわたる傾向であるが、農業人口の減少、高齢化といった問題も抱えている。

3. 若美町の歴史

若美町は、1889年に成立した潟西村と払戸村が1951年に合併してできた琴浜村が前身で、1965年町制施行を機に町内の3小学校区の主要集落名（渡辺・角間崎・宮沢）の頭文字をあわせて若美町が誕生した。なお、払戸地区（南部）と琴浜地区（北部）に農業協同組合が組織されている。以下、農協単位で述べることにする。

4. 若美町のキャベツ栽培について

図3-（1）を見ると、若美町は水田単作地域ということもあり、米が作付面積・出荷量とも最大である。畑作物のほとんどは、北部で生産されている。

図3-（2）を見ると、メロン・葉たばこ・キャベツといった作物の収益性が大きい。南部ではキャベツ、北部ではメロン・葉たばこが栽培されている。

キャベツのほとんどが南部で栽培されている要因は、技術的に容易・高所得率・労働時間が短いからである。また、転作物として有利な条件も持っている。（表1）。

北部は、キャベツより収益の高い作物を作付けしているため、南部ほど栽培されない。

図4-（1）を見ると、1988年まで、作付面積・出荷量とも減少し、1989年から急激に増加している。この要因を図4-（2）と比較しながら考察すると、1987年からはじまった水田農業確立政策により、転作物としてキャベツの作付けがなされたことによると思われる。価格保証制度を農協が設けて、農家を支援しているのも作付面積増加の一要因である。

南部では、農協が中心となってキャベツ栽培を促進しているが、北部は、個人単位での栽培が主であり、農協などの援助や組織的な栽培は見られない。

地区別では、作付面積が南部の方に集中しており、北部は6倍弱になっている。北部は、キャベツより収益性の大きい作物を栽培する傾向が強いため、キャベツの作付面積は小さい（表2）。

キャベツは地力消耗の激しい作物であり、ネコブなどの連作障害が発生する。若美町のキャベツは、新しい圃場である転作地で栽培されているため、病気の発生は少ない。しかし、地力の弱い圃場では、1～2年で障害がでる。若美町では、ブロックローテーションを主に行って連作障害に対処している。

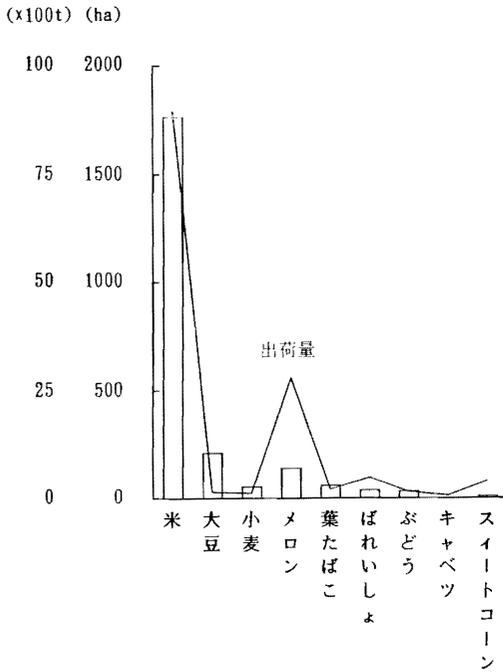


図3-1). 若美町における主要農産物の作付面積と出荷量
(役場資料より作成-1990-)

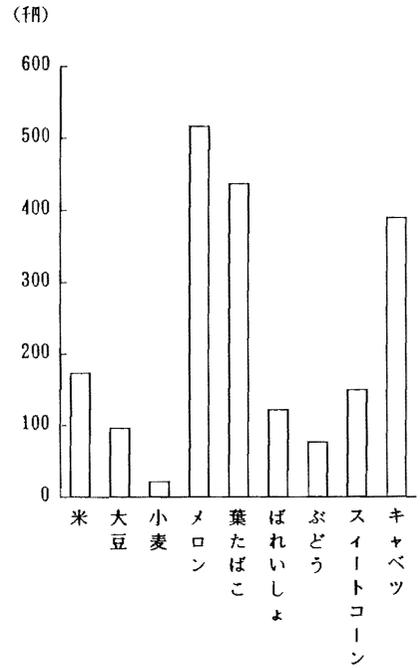


図3-2). 若美町における主要農産物の10aあたりの販売額
(役場資料より作成-1990-)

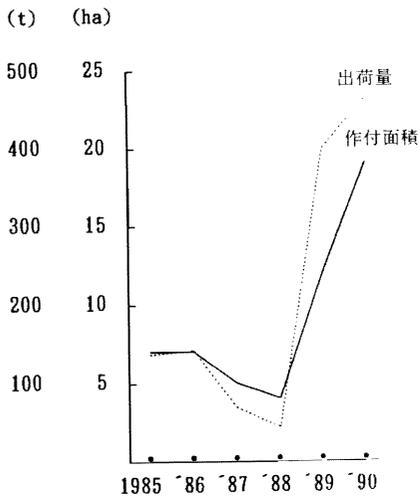


図4-1). 若美町におけるキャベツの作付面積と出荷量
(農林統計より作成)

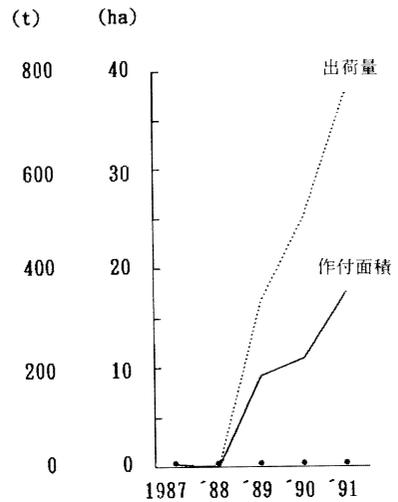


図4-2). 若美町の転作地におけるキャベツの作付面積と出荷量
(農協資料より作成)

表1. キャベツ作経営収支

租 \ 租	キャベツ
収量 kg × 単価 円	4500 × 70
粗 収 益	315,000
種 苗 費	7,000
肥 料 費	24,130
薬 剤 費	4,986
諸 材 料 費	11,100
光熱・動力費	2,250
農 機 具 費	10,947
建 物 費	1,012
経 水 利 費	1,000
そ の 他	0
小 計	63,225
包 装 費	2,000
費 運 賃	40,000
手 数 料	27,000
小 計	69,000
費 用 合 計	132,225
所 得	182,755
所得率 (%)	58.0
労 働 時 間	67.5h
時間あたりの労働報酬	2707.5

(農協資料より作成-1990-)

表2. 若美町の転作地における地区別キャベツ栽培農家数及び作付面積

	農家数(構成比)	キャベツ栽培農家数	キャベツ出荷農家数	作付面積
払 戸	513戸(100%)	39戸 (7.6%)	39戸 (7.6%)	1500 a
琴 浜	714戸(100%)	17戸 (2.4%)	17戸 (2.4%)	260 a

(農協資料より作成-1990-)

IV 若美町におけるキャベツの出荷について

若美町におけるキャベツの出荷状況は、南部が京浜中心で、北部は県内中心である。なお、県内の出荷地は隣接する秋田市がほとんどである。南部は組織化されていること・出荷量が多いことと農協が販売経路を確保しているため、必然的に京浜が多くなっている。これに対して、北部は、個人的な出荷がほとんどのため、隣接の秋田市へのお荷が中心となっている(図5)。

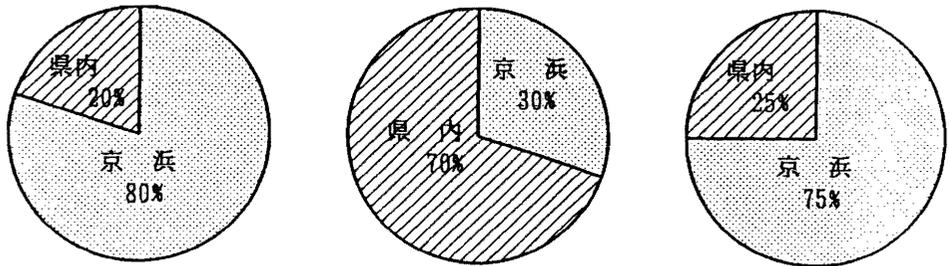


図5. 払戸地区の出荷地域

琴浜地区の出荷地域

若美町の出荷地域

(農協資料より作成-1990-)

V ま と め

秋田県においてキャベツの栽培は、減少の一途をたどっていたが、水田農業確立政策などによる転作によって減少は止まる傾向にある。キャベツは、労働時間が短いこと・技術的に容易なこと、価格保障制度などにより転作物としての作付面積は増加してきている。

若美町では、南部は水田単作地域、北部は稲作と畑作の複合地域というように性格に違いがある。転作において、前者は農協の指導のもとで、後者は個人単位で行っている。以上のことが、

栽培面積・出荷量・出荷地域に反映している。

キャベツの栽培は、農業の基幹としてではなく、あくまで副次的な位置を占めていることにすぎないが、農業経営においては欠くことのできない一環の中に組み込まれつつある。

問題点としては農業従事者の減少、連作障害などがあげられるが、行政サイドの支援と生産者の組織化・大規模化が推進され、農業経営が安定して行くことを期待したい。

【参 考 文 献】

今井敏信 (1990)：青森県東部地域における主要野菜の生産と流通

弘前大学教養部 「文化紀要」, 31, 1～32

佐藤寿志 (1987)：秋田市における農業基盤の変化と中核的農家の対応 秋大地理, 34, 7～12

館合伸哉 (1989)：田子町のニンニク生産 弘大地理, 25, 33～37

田野宏 (1985)：茨城県南部低湿地の水田利用再編対策への対応と特色 東北地理, 37-1, 1～15

照井美由喜 (1982)：秋田県羽後町におけるすいか栽培の地理学的研究 秋大地理, 29, 46～51

光岡浩二 (1979)：「農業地理学の方法と実態分析」 未来社, 276ページ

デイビット・グリッグ (1986)：「農業地理学入門」 原書房, 237ページ